

後期中英語における「知っている」および「できる」を表す 動詞についての覚え書

松 瀬 憲 司

A Note on Verbs Denoting 'to Know' and 'to Be Able' in Late Middle English

Kenji MATSUSE

(Received October 1, 2012)

The semantic shift of the meaning 'to be able' from *may* to *can* in Late Middle English seems to have been successively supported by the same syntactic environment for modal auxiliaries they could have in common, where the bare infinitive played a crucial role, because at that time its functional areas were being shrunk and shrunk due to the expansion of the prepositional infinitives. In addition, the frequent juxtaposition of *may* and *can* in the same sentence structure also must have contributed to reinforce the shift.

As lexical verbs, *connen*, *knowen*, and *witen* had the same meaning 'to have knowledge of', so they could be freely used as stylistic variants for fulfilling metrical exigency. And it is obvious that this synonymity and the semantic change that had once occurred in preterite-present verbs did work as the starting point which drove *can* to have the sense 'to be able' in the end.

Key words : preterite-present verb, modal auxiliary, bare infinitive, metrical exigency, synonymity

1 はじめに

チョーサーの『カンタベリ物語』(c1375-a1400 成立)の「断片I (グループA) 730-746行」には、次のような箇所がある。

- (1) a. For this ye *knowen* al so wel as I:
Whoso shal telle a tale after a man,
He moot reherce as ny as evere he *kan*
Everich a word, ... (ll. 730-733)
- b. He *may* nat spare, althogh he were his brother; (l. 737)
- c. And wel ye *woot* no vileynye is it.
Eek Plato seith, whoso *kan* hym rede, (ll. 740-741)
- d. My wit is short, ye *may* wel understonde. (l. 746)

このわずか17行の中に「知っている」と「できる」という意味に関わる表現が6回も使用されているのである。(1a)の *knowen* はもちろん現代英語 (P[resent-]d[ay] E[nglish], 以下 PDE と略す) でも know であるが, ここでは, *kan* (= *can*, < *connen*) もまた know と解釈される。さらに, (1c)の *woot* (< *witen*, PDE to wit) も PDE では know であり, この場合の *kan* は原形不定詞 (下線で表示) を従えているので know how to と解されるが, それはむしろ be able to と言ってもいい。そして(1b&c)の *may* (< *mouen*) は, 「可能性 (possibility)」ではなく, 「能力 (ability)」を表す *can* と解さねばならない。

このように, 少なくとも中英語 (M[iddle] E[nglish]) 期にはまだ, これら一連の動詞群に見られる意味的繋がりは, PDE よりもはるかに密接であったことがよく分かる。これには, 実は, 古英語 (O[ld] E[nglish]) 期から既に存在していた「過去現在動詞 (preterite-present verb)」という動詞範疇が大きく関わっており, 事実, ME の

動詞 *connen*, *mouen*, *witen* は全て OE の過去現在動詞 *cunnan*, *magan*, *witan* に由来している (唯一 *knowen* だけが OE の一般的な強変化動詞 [第 7 類] *cnawan* に由来する)。

Mitchell & Robinson (2007⁷: 52) によれば, 過去現在動詞は “... have a strong past tense with a present meaning (cf. Lat[in] *novi* ‘I know’) and a new weak past tense.” とあり, その新たに作られた弱変化過去形に関しては, Baker (2007²: 78) が “...built on the second past root, with *-d-* or *-f-* added.” と述べているように, それが PDE の *could* (OE *cuðe*) や *might* (OE *meahte*) という「過去」形に脈々と受け継がれていることが分かる。¹⁾ また, Smith (2009: 121) は, “The verbs *cunnan*, *magan*, *sculan* are the ancestors of some PDE ‘modal auxiliaries’; although in OE they seem still to have been lexical verbs, their unusual paradigms made them ripe for transfer to the closed-class set of ‘grammatical words’, i.e. for *grammaticalisation*.” と述べ, 過去現在動詞の持つ特異な語形変化体系が *can*, *may*, *shall* などが受けることになった「法助動詞化」という文法化への引き金を引いたことを指摘している。

しかし『カンタベリ物語』のこの箇所に見られる *can* と *may* の機能分布からも分かるように, ME 後期には, PDE では定着している厳格な法助動詞の体系はまだ確立していなかった。語彙動詞と法助動詞が依然として未分化であったことがその第一の要因と言えるが, そればかりではなく, 法助動詞としての機能そのものも多分に過渡的なものであったと言っている。この法助動詞の発達に関しては, 小野 (1978²) に詳細な議論が既にあるが, ME *witen* (OE *witan*) との関連までは議論されておらず, 後期 ME の資料として Chaucer しか取り上げられていないので, 本稿では, 特にこの時期 (14 世紀後半) に焦点を当て, Horobin (2010: 37) が “... the notion of ME as a single entity is something of an abstraction: the reality is more a series of ME dialects.” と指摘する点をも考慮しつつ, これら動詞の意味ネットワークと法助動詞体系成立との関係性を再度議論してみたい。

本稿の構成は次の通りである。次節では, まず, 過去現在動詞が成立するメカニズムを概観し, その事象に関わる動詞の過去形と現在形の意味関係を整理した上で, 3 節では, 法助動詞としての *connen* と *mouen* の方を取り上げ, それに続けて 4 節では, 語彙動詞としての *connen* といわゆる語彙動詞である *knowen* および *witen* との関わりを見ていく。そして 5 節で全体の議論をまとめることにする。

今回調査したコーパスは以下の通りで, 韻文も散文も最初の 500 行を対象とした (南東部方言で書かれた韻文資料を入手できなかったため, 散文を利用した)。

(2) 方言	作品名	成立年	作品形式 [略号]
・ North	<i>Ywain and Gawain</i>	?c1350	Rhymed verse [<i>Ywain</i>]
・ West Midland	<i>Sir Gawain and the Green Knight</i>	?c1390	Alliterative verse [<i>SGGK</i>]
・ East Midland	<i>The Canterbury Tales</i>	c1375-a1400	Rhymed verse [<i>CT (A)</i>]
・ South Western	<i>Pierce the Plowmans Crede</i>	?c1390	Alliterative verse [<i>PPI</i>]
・ South Eastern	<i>Ayenbite of Inwit</i>	1340	Prose [<i>Ayenb.</i>]

2 過去現在動詞の成立: 「見た」からこそ「知っている」

まずここでは, 「なぜ過去形が現在形として使われるようになるのか」ということをもう一度考えたい。過去現在動詞に関して前節で, Mitchell & Robinson (2007⁷) が比較の意味で指摘しているように, ラテン語で *novi* は英語では「(私は) 知っている」と翻訳されるが, これは実は「知る」を表す動詞 *noscere* ‘to know’ の直説法能動「完了形」なのである。²⁾ 「知った」という過去の行為は, 現在から見た場合, 通常その知識の蓄積を意味するので, それを記憶から取り出せる限り「(現在も) 知っている」(現在完了) と解釈されうるということだろう。ここに語形上は過去だが, その意味内容は現在を表すという図式が成立する。

このことに関連して, 清水 (2012: 80-81) は, 印欧祖語に見られた三種のアスペクト「未完了」・「アオリスト (単純 [過去] 相)」・「完了」は, ゲルマン祖語においては, 「アオリスト」が破棄され, 「未完了」と「完了」がそれぞれ「現在」と「過去」時制に編入再編されたとし, 「ゲルマン語の過去形が印欧祖語の状態表現としての完了形から発達した事情は, 完了形に由来する一部の語形が過去形にならず, 状態の意味を保って現在形に再解釈された事実」に反映している (傍点筆者) と指摘する。その「一部の語形」こそが過去現在動詞に他ならない。Mitchell & Robinson (2012⁸: 52-53) も OE *witan* の例を挙げながら, 改めて第 8 版でそのことを詳しく説明している。

- (3) **witan* ‘know’ was originally a strong Class I verb meaning ‘see’: **witan*, *wat*, *witon*, *witen*. But if one has seen something in the past, then one knows it in the present, and so the preterite forms *wat*, *witon* ‘saw’ came to have the present meaning ‘know’. Once this happened, new preterite forms were made by adding to the (original preterite) root *wit-* the weak preterite endings *-de* and *-don*. Through normal sound changes **witede* and **witedon* then became *wiste* and *wiston* with the meaning ‘knew’. The original strong present form **witan* and its derivatives were lost.

このように、「見た」あるいは「見てしまった」ということは「知っている」と同義と考えられたのである。この *witan* は、*OED*² (s.v. *wit*) によれば、印欧祖語の **woid-/weid-/wid-* ‘to see’ にまで遡ることができ、そこからサンスクリットやギリシア語においても同様に「知識」や「知られた」という意味が派生していると言う。ただし、同語源を持つラテン語 *videre* ‘to see’ の完了形は *vidi* ‘I have seen/ I saw’ なのだが、これについてはサンスクリットやギリシア語と違って ‘I know’ という意味を発達させていない点が非常に興味深い。前述の通り「知っている」は、同じ完了形でも *noscere* ‘to know’ の完了形 *novi* が担っているのである。そこで、上記の議論から、過去形が現在形として機能するという現象は以下のように整理できる。

- (4) *novi* 型: a. know → have known/knew = know
b. 知る → 知った / 知ってしまった → (今も) 知っている
- (5) *wat* 型: a. see → have seen/saw = know
b. 見る → 見た / 見てしまった → 知っている

つまり、過去形が、(4) では、ある動作の結果生じた、その同じ動作の現在の状態を表しており、(5) では、その動作の結果に対して、「意味的に関連する別の視点」から見た現在の認識を表している、と言えよう。PDE では例えば、*should* は (4) の *novi* 型の典型であろうし (*shall* 「すべきである」 → *should* 「すべきだった [結果]」 → 「まだしていない [現在の状態]」 = 「すべきである [現在の状態]」)³⁾ 本稿で取り上げる *can* は (4) の *novi* 型に当てはまると思われる。また *may* は (5) の *wat* 型と考えられる。これらに関しては、次節で詳細に検討することにする。

3 法助動詞 *connen* vs. *mouen*

動詞 *connen* と *mouen* に関しては、大きく分けて議論すべき点が二つある。それは、両者に見られる、過去現在動詞としてのメカニズムの比較、および法助動詞としての意味機能「(行為を) できる」が *mouen* から *connen* へ移譲されたことについてである。

まず、*OED*² (s.v. *can* & *may*) の過去現在動詞に関わる記述と PDE での現用法をまとめてみると、以下の (6)・(7) のようになる。

- (6) a. OE *cunnan* / ME *connen* → *can* (preterite) = *can* (present) [→ *could* (new preterite)]
know (how), be mentally or intellectually able → have attained to knowledge = know [→ *knew*]
b. *can* (present): know how to → *can* (present): be able to, expressing possibility, be allowed to
- (7) a. OE *magan* / ME *mouen* → *may* (preterite) = *may* (present) [→ *might* (new preterite)] (註 1) 参照
be strong, have power → have had power to do something = be possible, be able to do ...
[→ was able to ...]
b. *may* (present): be possible, be able to → *may* (present): be allowed to, expressing possibility

次に、それらが多義的に持つ意味の中で主要なものについて、*can* に関しては、(8)・(9) に、*may* に関しては、(10)・(11) にそれぞれに示す。なお、末尾の角括弧内には、その意味で使用された用例の *OED*² での初出年を記載している。

- (8) a. *trans[itive]* know; know or be acquainted with (a person); know or have learned (a thing);
have knowledge of (a language, art, etc.) *Obs[olete]* [c1000]
b. *intr[ansitive]* have knowledge, know of *arch[aic]* [a1250]
- (9) a. know how/have learned/be intellectually able (to do anything) [a1154]
b. be able; have the power, ability or capacity.
(Said of physical as well as mental, and of natural as well as acquired ability = L[atin] *posse*, F[rench] *pouvoir*) [a1300]

- c. expressing a possible contingency = may possibly [c1250]
- d. expressing possibility; be permitted or enabled by the conditions of the case [1542]
- e. be allowed to, be given permission to = MAY (11d) [1879]
- f. get to know; learn, study = CON *Obs.* [1394]
- (10) *intr.* be strong; have power or influence; prevail *Obs.* [c825]
- (11) a. expressing ability or power = CAN (9b) *Obs.* [10th c.]
- b. expressing objective possibility, opportunity, or absence of prohibitive conditions = CAN (9d) [c888]
- c. expressing permission or sanction: be allowed (to do something) by authority, law, rule, morality, reason, etc. [a1000]
- d. expressing subjective possibility, i.e. the admissibility of a supposition [c1205]

上記 (6a)・(8a) と (7a)・(10) から、前節で指摘したように、過去現在動詞としては、明らかに can は *novi* 型であり、may は *wat* 型であることが分かる。

その後の展開においては、can の場合 (6b) のように、もともと潜在的意味としてあった ‘be mentally or intellectually able’ という部分が顕在化することで、(9a) を経て (9b) の ‘be able to’ を獲得するに至ったのだろうが、そこには (9c) の「可能性」への言及も介在していたと考えられる。何かの有り様を「知っている」ということはそれが「ありうる」ことを認めることでもあり、それが現実にも「ありうる」ようにもって行くことこそが、それが「できる」ということに他ならない。そこからさらに「外的要因によって可能」であることを示す (9d) を経て can は (9e) の「許可」の意味さえも身につけていったのである。

他方、may は、まず原点の「力がある」ということが、何かを存在させられる・「ありうる」ようにさせるといった観点から、(11b) のような「客観的な」可能性に言及することを通して、「できる」という (9a) の「能力」の意味を獲得し、(7b) にあるように、そのことが今度は (11c) のような外的な力による「許可」に繋がっていったようだ。そして最終的には、そこに、より「主観的判断としての」可能性 (11d) までも生ずるに至ったのであろう。「してもよい」ということは、そこに何ら障害がないことを意味し、それは主観的には、当該の事象が生じる可能性を判断すること（「かもしれない」）に繋がるからである。

それでは、上述のような、can および may が手にしてきた意味の変遷は、ME 期にはどのように推移していたのであろうか。MED (s.v. *connen* & *mouen*) を紐解いてみると、*connen* に関しては、(12)・(13) に、*mouen* に関しては、(14)・(15) にあるように記述されている（同じく角括弧内には、MED におけるその意味での用例の初出年を記載した）。

- (12) a. have ability, capability, or skill; be able/be capable/know how to do something [1123]
- b. be in a position to do/be something; be justified or right in doing something; be possible or right under the circumstances [?a1160]
- (13) a. have mastery of (a skill); be versed or competent in (a craft, occupation, activity) [a1225 (?a1200)]
- b. know or understand (a language), have mastery of [a1225 (OE)]
- c. know or have mastery of (a field of learning, a body of doctrines, etc.) [?a1200]
- d. possess knowledge or understanding [c1325 (c1300)]
- e. know (particular things, facts or truths); be familiar with or informed about; come to know, understand, recognize [a1150 (c1125)]
- (14) be strong, have power, avail, prevail; help; be worthy [c1150 (OE)]
- (15) a. be able to do something; be capable of doing something [c1150 (OE)]
- b. perhaps/might be able to do or have something, etc. [c1150 (OE)]
- c. be permitted, be allowed to do something [c1200]

まず、*connen* については、既に 12 世紀の段階で、「能力」や「可能性」に言及する法助動詞的用法が表れていたことが (12) から十分確かめられるし、と同時に (13) からは、OE からあったオリジナルの「知っている」という意味も依然として残されていたことも確認できる。ただ、ここで *connen* が保持していた「知っている」という意味に関して特に指摘したいことがある。それは、(13a) ~ (13c) からわかるように、ME 期の *connen* が持つ「知っている」の意味の中核は ‘have mastery of’ であったということである。つまり、ただ「知っている」だけではなく特に「よく知っている」を意味したということであろう。そしてそのことと平行するかのよう、CT (A) では、以下の (16) のように「*wel koude* + 原形不定詞」という連鎖が非常によく用いられるという事実

は注目に値する (8 例).⁴⁾

(16) a. *Wel koude he sitte on hors and faire ryde.* (CT(A), 94)

b. *In felaweshipe wel koude she laughe and carpe.* (CT(A), 474)

次に, mouen だが, OE 以来の「力がある」という意味も依然としてこの時期健在であったことは, (14) から理解できるが, その意味の主体はむしろ (15) の法助動詞の用法だったようである.⁵⁾ 特に, ME 期には, (15c) の「許可」の意味は mouen のみに見られ, connen にはまだ生じていないことも再度確認できた. そしてこの「許可」の意味の獲得が, もともとこの意味を持っていた moten (< OE motan, PDE must, 上例 (1a) の moot 参照) を 'be obliged to' の意味の方に追いやっていったと小野 (1978²: 194) は指摘する.

さてそこで, 今回の ME 後期 14 世紀後半コーパスにおける「法助動詞」としての connen と mouen の分布についてだが, 下表 (17) のような結果を得た. なお, 調査対象の現在形 [旧過去形] は can/kan および may/mow で, 過去形 [新過去形] は couth/coude および might/moght である (実際には, (19) 以下に示した例からも分かるように, これらの形だけでなく様々な綴りの変種および人称活用形があることは言うまでもない).

(17)		can/kan	couth	coude	may	mow	might	moght
<i>Ywain</i>	[N]	1	2	0	7	0	14	1
<i>SGGK</i>	[WMid]	0	1	0	9	0	11	1
<i>CT(A)</i>	[EMid]	0	1	15	2	0	4	0
<i>PPI.</i>	[SW]	5	1	1	8	1	7	0
<i>Ayenb.</i>	[SE]	0	0	0	12	3	1	0

N.B. 表中「0」は今回のコーパスには無かった場合と元来使用されていない場合の両方を表している.

では, 上表も含めていくつか議論点を拾うことにする.

(18) a. *CT(A)* における過去形 *coude* の特殊性

b. (以下の例文では下線を施している) 原形不定詞を従える, may・can の法助動詞用法の恒常性

c. 法助動詞用法のみと置いていい mouen と語彙動詞としても機能する connen

形態論的観点から述べると, まず, may の変種 mow は, *Ywain*, *SGGK*, *CT(A)* という北・中部の資料には現れず, (19a&b) のように南部の資料にのみ姿を見せる. しかしその南部においてもどうやら過去形として moght は使用されていないようなのだが, 今度は逆に (20a&b) から, *Ywain*, *SGGK* では, それが使用されていることが分かる (*CT(A)* は, may/might のみ使用).

(19) a. *So þat þou mowe amenden our hous · wiþ money oþer elles.* (*PPI.*, 396)

b. *Ne he ne may habbe akele : þet he him moze excusi.* (*Ayenb.*, 6/34-7/1)⁶⁾

(20) a. *Þarfore he prayed me, if I moght,* (*Ywain*, 226)

b. *Soth moght no mon say.* (*SGGK*, 84)

次に, (18a) の論点に関わる can の過去形についてだが, この時期は coude よりも couth の方が基本形であったようだ (今回のコーパスではたまたま発見されなかった *Ayenb.* も含めて 5 作品全てに現れうる). それに対して前者は, *Ywain*, *SGGK*, *Ayenb.* では全く使用されていない. しかし, *CT(A)* では, 明らかに coude の方が主流になっていると言えるので (これは語彙動詞としての用法にも当てはまる. 下表 (30) 参照), これは *CT(A)* にもみ見られる coude の特殊性と置いていいかもしれない. さらに付け加えれば, *CT(A)* の (21a) で kouth の方が現れているのは, この場合明らかに Dertemouthe と韻を踏ませる必要があったからである.

(21) a. *For aught I woot, he was of Dertemouthe.*

He rood upon a roucy, as he kouth, (*CT(A)*, 389-390)

b. *He koude rooste, and sethe, and broille, and frye,* (*CT(A)*, 383)

c. *To any worþely wijzt · þat wissen me coupe* (*PPI.*, 233)

d. *þat coude me my Crede teche · and trewliche enfourme,* (*PPI.*, 272)

この *CT(A)* に見られる coude の優勢は, should (< ME sholde) や would (< ME wolde) に対する, 法助動詞としての機能上の共通性のために, 視覚的類推による非語源的な綴り字 <1> を挿入したことにより, 最終的に, 近代英語 (Mod[ern] E[nglish]) 形 'could' を生じるに至った. *OED*² (s.v. can) によれば, それは 1525 年頃のことである. しかし, この時期はまだ, 文法上法助動詞体系そのものが明確に整備されていなかったのもので, 言わば「疑似」法助動詞として, オリジナルな couth とともに <1> のない coude が使用されていたのである.

論点 (18b) の, may および can の原形不定詞を従える法助動詞用法が恒常的に見られたことは (コーパスの作品すべてで必ずしも確認できなかったが), *OED*² や *MED* の記述からも明らかである。つまり, 両者に既に統語上共通する環境は十分に整備されていたと言える。

最後に, (18c) の論点についてだが, *OED*² の記述 (9) および (11) から明らかなように, 法助動詞性を帯びた意味 'be able to' を先に獲得したのは *mouen* の方である。上述のように語彙動詞としての性格の方が強かった *connen* は, 「知っている」という意味で使われるときに, 目的語に動詞的名詞である原形不定詞を取ることで法助動詞性を強めていったのである。このように *mouen* と *connen* 間での「できる」の意味の移譲は, 法助動詞性確立のタイムラグによって実現されたと考えられる。とは言うものの, *MED* (s.v. *mouen*) によれば, PDE では許されない不定詞形 *mouen* 'to be able to' や分詞形 *mouinge* 'being able to', *might* 'been able to' の用法までもがウィクリフ版聖書 [a1382] から「新たに」見られるようになると言う。したがってこのことは, 当時は *mouen* でさえもまだ完全な法助動詞として確立しておらず, 多分に語彙動詞として捉えられていたことの証左となるだろう。

また, *connen* が法助動詞性を強め, 最終的に両者間で「できる」の意味を移譲するきっかけとなったもう一つの現象としては, *mouen* と *connen* を並置連結して使用する構文の存在を挙げることができる。*MED* (s.v. *mouen*) は以下のような例を掲載している。

(22) a. I ne *can* ne i *mai tellen* alle þe wunder ne alle þe pines ðat hi diden wrecce men on þis land.

(*Peterborough Chronicle*, anno 1137 [?a1160])

b. all Adames ofspring hafð be-smiten, ðe *speken cuðen* oðer *mihten*, wið-uten Crist

(*Vices & Virtues (1)*, 9/24 [a1225(c1200)])

両者が持つ似通った意味と構文による縛りが相俟って, *connen* に「できる」の意味が定着し易くなるお膳立てができていたのである。⁷⁾

4 語彙動詞 *connen* vs. *knowen/witen*

前節では, 特に *connen* の法助動詞化への道筋を中心に議論したが, 本節では, その語彙動詞としての実態について, 当時同じような意味を持っていた他の語彙動詞 *knowen* と *witen* との競合関係に着目しながら分析していく。

まず, *OED*² (s.v. *know & wit*) の記述から見てみよう (以下その主要な意味を, *know* については, (23) ~ (25) に, *wit* については, (26) に提示する。角括弧内はその意味で使用された例の初出年。⁸⁾

(23) a. *trans.* perceive (a thing or person) as identical with one perceived before, or of which one has a previous notion; recognize; identify [c1000]

b. recognize or distinguish, or be able to distinguish (one thing) *from* (another) = OE. *točanwan* [c1375]

c. *trans.* recognize in some capacity; acknowledge; admit the claims or authority of *Obs.* [a1225]

(24) a. be acquainted with (a thing, a place, or a person); be familiar with by experience, or through information or report (= F. *connaître*, Ger[man] *kennen*), have such familiarity with (something) as gives understanding or insight [c1175]

b. be personally acquainted with (a person) be familiar or intimate with; become acquainted with [1377]

(25) a. have cognizance of (something), through observation, inquiry, or information; be aware or apprised of (= F. *savoir*, Ger. *wissen*); become cognizant of, learn through information or inquiry, ascertain, find out [a1225]

b. be conversant with (a body of facts, principles, a method of action, etc.) through instruction, study, or practice; esp. have practical understanding of (a science, language, profession, etc.); have learnt by study or practical experience; versed or skilled in; acquire skill in, learn [a1400]

c. be cognizant, conscious, or aware of (a fact); be formed of, have learned; apprehend (with the mind), understand [c1200 (a1000)]

d. *know how*: understand the way, or be able (to do something): cf. CAN (9a) [a1548]

(26) a. *trans.* have cognizance or knowledge of; be aware of; know (as a fact or an existing thing)

= (25a&c)

[888 (971)]

- b. become aware of, gain knowledge of, get or come to know; find out, ascertain, discover; be informed of, learn. Often not distinguishable from the simple sense 'know', esp. with *will* or *would* (= wish, would like), or with *ere* or *or* (= before) *Obs.* = (25a) [c1000]
- c. *trans.* have practical knowledge of; be conversant with or versed in = (25b) *Obs.* [a1000]
- d. with *to* and *inf.*: know how, be able = (25d) [1340-70]
- e. recognize; distinguish, discern, detect = (23a) *Obs.* [a1300]

ここで両者が持つ主要な意味の間の対応関係と使用開始時期に注目して表にしてみると次の (27) のようになる (なお、特に 'know how, be able' という意味に関しては、角括弧内に *MED* (s.v. *knowen* & *witen*) の情報も記載した)。

(27)		know	wit
'have knowledge of'	(知っている)	a1225 · c1200 (a1000)	888 (971)
'recognize'	([違いを] 知っている)	c1000	a1300
'be conversant with'	([よく] 知っている)	a1400	a1000
'know how, be able'	([仕方を] 知っている)	a1548 [a1250 (?c1150)]	1340-70 [c1330 (c1200)]

さらに比較のために、*connen* の語彙動詞用法を以下の (28) に再掲する。

- (28) a. *trans.* know; know or be acquainted with (a person); know or have learned (a thing); have knowledge of (a language, art, etc.) *Obs.* (= (8a)) [c1000]
- b. *intr.* have knowledge, know of *arch.* (= (8b)) [a1250]
- c. know how/have learned/be intellectually able (to do anything) (= (9a)) [a1154]

さて、(27) と (28) より分かることがいくつかある。まず、'have knowledge of' の意味の獲得順は、*wit* → *connen* → *know* の順であったということだ。つまり、F[rench] *savoir*, G[erman] *wissen* に相当するこの意味を獲得するのは、*know* が一番遅かったのである (だからこそ、*know* が最終的にバトンを受け取って現在その意味を保持できているとも言える)。逆に言うと、元々 *know* (OE *cnawan*) が持っていた意味は、(24) にあるように F. *connaître*, G. *kennen* の意味 'be acquainted with' だったのであり、OE の *cunnan* や *witan* には、その意味はなかったのである。しかし、その後 *know* は *cunnan* や *witan* が持っていた意味までも精神的に取り込んでいき、結果、むしろ *can* や *wit* の方がそれらを放棄するに至ったということである。

次に、'recognize' と 'be conversant with' という意味についてだが、前者は *know* に現れる方が早く、後者はその逆で *wit* に現れる方が早かった。しかし、(26b&c) から分かるように、*wit* では両者ともに廃用になってしまっている。実際のところ、PDE では *wit* は、*LDCE*⁵ (s.v. *wit*) において、もはや名詞としてしか記載されていないことから分かるように、(その意味範囲を著しく狭めたと言うよりも) その動詞用法そのものが無きに等しいものになっていると言っていい。なお、以下の (29) は、前者の 'recognize' を表す *knowen* だが、*coude* と併用されている。このことから改めて当時の *connen* に起きていた法助動詞化の進行度合いを確認することができる。(29) *Wel koude he knowe a draughte of Londoun ale.* (CT (A), 382)

最後に、(F. *pouvoir*, G. *können* に相当する) 'know how, be able' の場合、その意味の獲得順は、*OED*² では、*connen* → *wit* → *know*、*MED* では、*connen* → *know* → *wit* の順となっており、初出年に異同が見られる (*wit* に関しては、ほぼ一致しているが、*know* で開きが大きい)。しかし、いずれにしても、*connen* がオリジナルであることに間違いはない。これは、*know* や *wit* においてこの用法が確立されるのが、(時期的にどちらが早いとしても) 不定詞の主流が *to* や *for to* の付いた前置詞不定詞になっていく ME 以降であることを考慮すると、*to* が介在しない原形不定詞を、普通の名詞目的語と同じステータスで既に使用できていた *connen* が両者に先んじてこの意味を獲得したことは驚くに当たらない。Fischer (1992: 263) も、"The close relation between a modal and its infinitive is emphasised by the fact that the *to*-infinitive never replaces the bare infinitive as happened after most other full verbs, ..." と述べて、共起できた原形不定詞の重要性を指摘している。⁹⁾

したがって、ME 後期の状況としては、これらの語彙動詞はほとんど同義に使用できる、使い勝手のいい (文体的) オプションだったと考えることができる。その中で、*know* だけが (24) の意味を持っている点で異彩を放っていたと言えよう。

では、今回のコーパスでは、これらの動詞はどのような分布を見せるのであろうか。下表 (30) に、今回調査した不定詞形 *connen*, *knowen*, *witen*、現在形 *can/con*, *know*, *wot*、過去形 *couth/coude*, *knew*, *wiste* の各数値をあげ

る(上表(17)に同じく、これらの形態は、これら以外の綴りや人称活用形の代表として提示している)。

(30)		connen	can	con	couth	coude	knowen	know	knew	witen	wot	wiste
<i>Ywain</i>	[N]	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2	5
<i>SGGK</i>	[WMid]	0	0	0	0	0	0	4	0	0	3	1
<i>CT(A)</i>	[EMid]	0	2	0	0	5	0	2	4	0	2	3
<i>PPI.</i>	[SW]	2	5	5	1	0	1	6	0	1	2	0
<i>Ayenb.</i>	[SE]	1	0	0	0	0	0	2	0	3	5	0

N.B. 表中「0」は今回のコーパスには無かった場合と元来使用されていない場合の両方を表している。
また、wotには否定辞統合形 *noot* の数値もカウントしている。

不定詞形の使用については、まず、(31a&b)のように *connen* の不定詞形が存在すること自体が、*connen* が語彙動詞として機能していたことの証左となる。

- (31) a. *For to conne my Crede · Crist for to folwen?* (PPI., 101)
 b. *Þise ten hestes byep to echen þet heþ scele and elde þhyealde to conne and to done.* (Ayenb., 11/22-23)
 c. *Þanne y munte me forþ · þe mynstre to knowen,* (PPI., 171)
 d. *Þanne wende y to wyten · & wiþ a whigt y mette,* (PPI., 32)
 e. *Þe sixte article is of his arizinge, þet is to wytene, ...* (Ayenb., 13/10)

そして明らかに、(31d)で、*conne* や *knowen* ではなく *wyten* が現れているのは、微妙な意味の差異のためと言うよりもむしろ、頭韻/w/の要求のためと言っていい。また、(31e)の *þet is to wytene* (= that is to say) は定型表現であり、*Ayenb.* の他の2例(14/7と18/36-19/1)も同様である。

次に、現在形で議論すべき点は、特に *can* と *con* の使い分けである。

- (32) a. *For y can nohzt my Crede · y kare well harde;*
For y can funden no man · þat fully byleueþ (PPI., 448-449)
 b. *Þouȝ þou conne nouzt þi Crist · kare þou no more.* (PPI., 131)
 c. *Everich, for the wisdom that he kan,*
Was shaply for to been an alderman (CT(A), 371-372)

一般的に言って、*connen* には、(32a)のような直説法一~三人称単数では *can* が現れ、直説法複数や(32b)のような仮定法(接続法)では *con* が現れるという、OEから受け継いだ形態的特徴は確かにここでも見られた。¹⁰⁾ それだけではなく、今回のコーパスで唯一 *con* の使用を確認できた *PPI.* での用例を見てみると、両形態が現れる場合、*can* には語彙動詞用法だけでなく法助動詞用法があるが、他方、*con* には語彙動詞用法しかないような分布を示した。しかし *SGGK* では、そもそも *can* という形態自体が使われないために、*con* が語彙動詞と法助動詞を兼ねていることが Tolkien & Gordon (1967²⁾) で確認できたし、また *Ayenb.* では、両形態が現れ、なおかつ *con* も法助動詞用法を持つことが Gradon (1965 & 1979) で確かめられた。すなわち、機能的に見ても ME 後期には、*can* と *con* は単なる異形態同士であったのであり、そこに人称語尾や仮定法の衰退等が加わって、その後最終的に *can* への形態の統一が促進されていったのであろう。さらに、*can* を使う別の動機として、(32c)では、脚韻の要請で *con* (あるいは、*know* や *wit*) ではなく、*kan* が選ばれたのであろうことは明白である。

では、過去形 *couth* と *coude* の使い分けについてはどうであろうか。

- (33) a. *I hopid þat he no wittes kowth,* (Ywain, 275)
 b. *And zif þei coupen her crede · oþer on Crist leueden,* (PPI., 62)
 c. *Ther koude no wyght pynche at his writyng;*
And every statut koude he pleyn by rote. (CT(A), 326-327)

前節で議論した法助動詞 *connen* の過去形の場合と同じく、少なくとも今回のコーパスにおいては、*CT(A)* においてのみ *coude* という形態が主流であると言える。また、語彙動詞として発見された *couth* も *CT(A)* にはあるが、それは過去形ではなく、以下のように「過去分詞」形であった。¹¹⁾

- (34) *To ferne halwes, kowthe in sondry londes;* (CT(A), 14)

最後に、特に *wot/wiste* におもしろい傾向が見られた。

- (35) a. *I wate þat he was largely* (Ywain, 423)
 b. *He wiste that a man was repentaunt;* (CT(A), 228)

- (36) a. I *wot* never where thou wonyes, bi hym that me wroght, (SGGK, 399)
 b. þet hi *wyʒe* hou hi ssolle ham-zelue ssriue, (Ayenb. 5/10-11)
 c. Sone þai *wist* whare I had bene, (Ywain, 451)
 d. Never more then thay *wyste* from quethen he watz wonnen. (SGGK, 461)
- (37) Ther as he *wiste* to have a good pitaunce. (CT (A), 224)

それは、(35) の *that* 節、(36) の *wh-* 語 (*whare*, *quethen* ‘where’; *hou* ‘how’) 節と共起する例が多く見られたことである。これに対して、今回のコーパスでは、*know/knew* については、節と共起する例は発見されなかった。¹²⁾ また、加えて *CT (A)* では、(37) の不定詞節を目的語に取る例も見られた。これは、上記 (26d) で示した、ME 後期頃から見られるようになった「新しい」用法である。

このように、ME 後期の状況としては、*know* と *wit* の差別化はある程度既に確立していたと言えるが、同時に三者間には同義性が見られ、その同義性がこの後 *can* が法助動詞のみの機能へシフトする流れを促進する十分な動機となったと思われる。

5 まとめ

「同義性」は必ず何らかの分化を生じるものだが、これらの動詞は PDE で見事にそれを果たしている。つまり、「知っている」は *know* が担当し、「できる」は *can* が、そして *wit* は動詞用法そのものをほとんど放棄し、その機能領域を名詞用法に限定してきていると言える。確かに、「可能性」の意味を共有している状況は依然としてあるので、語用論的意味として「外付け的に」、*can* が *may* の「許可」の機能に擦り寄ってきているが、「できる」を表す機能そのものは、ME 後期とは違って *may* にはない。

今回この分化の流れを振り返ってみたが、中英語後期 (14 世紀後半) には、これら「知っている」および「できる」を表す一連の動詞群の語彙動詞としての振る舞いに関して、まず、中核的意味である ‘have knowledge of’ は、*connen*, *knowen*, *witen* のすべてに存在したので、特に韻文における使用では、韻律上の要請に応えうる便利な (文体的) オプションとして利用されていたことが窺える事例が少なからずあるということが明らかになった。そしてこの状況があったからこそ、*can* が法助動詞性をさらに強化し (逆に言えば、語彙動詞性を失い)、法助動詞に特化していく道筋が形成されていったと考えられる。そしてその後法助動詞としての機能を確立していく *can* と *may* に関しては、依然として両者に語彙動詞用法と法助動詞 (的) 用法が混在する状況の下で、かつて過去現在動詞で起きたような、*may* から *can* への「意味移行 (semantic shift)」が共通の統語環境 (両者の並置による強化と原形不定詞という、従える不定詞形態の特異性を含む) に支えられて展開したと言える。

註

- 1) おもしろいことに、PDE では、これら新たに作られた過去形にも再び「現在の意味」が生じてしまっている。それでも *could* はまだ、本来の直説法過去の用法を (特に否定形において) 保持しているので、いわゆる「過去形」であると言ってもいいが、*might* に至っては、時制の一致の場合を除いて直説法用法はほとんど消失していると言ってよく、実質的に現在のことに言及する仮定法 (接続法) 用法が主流になってしまっている (もちろん完了不定詞を伴って過去のことにも言及できることは言うまでもないが)。これは、法助動詞に限らず、英語では、仮定法を明示的に表す手段としての専用の屈折を消失してしまったことが動詞全般における直説法「過去形」の機能拡大に繋がったことに関係している。つまり、過去形が仮定法屈折の代替物になったのである。
- 2) ラテン語の *noscere* をいわゆる「過去現在動詞」と呼んでいいかどうかは疑問が残るところである。ただ、ラテン語では、完了形は主に「単純過去」を表すので、*novi* は、通常ならば ‘I knew’ 「知った」に相当するのだが、この動詞を含めていくつかの動詞に限っては、「現在完了」(‘I have known’) と捉えられたらしく [中山 (2007: 76-77) ・水谷 (2009: s.v. *nosco*)], Mitchell & Robinson (2007⁷) では、それをさらに進めて現在形 (“cf. Lat. *novi* ‘I know’”) と見なしているところに注意したい。
- 3) 実は、もともと *shall* 自体 OE *sculan* 「すべきである」の過去形で、「すべきだった」を表していたのが、結果状態を表すようになったために、「すべきである」と捉えられるようになり、新たな過去形 *should* が作られたという事情がある。そしてその過去形が再び現在の解釈を受けるようになったのである。また、この *novi* 型は、PDE では二つの型を取っているようだ。ひとつは、*know* がそうであるように、動作の完了の意味を現在形が取り込んでしまっている型、つまり現在

形が動作と状態双方を表すことのできる動詞として実現している型と、shouldのように、いわゆる過去形が現在形として使用される型である。

- 4) ちなみに、コーパスの500行ではなく、CT(A)の858行(*General Prologue* 全体)で見た場合は、14例になる。しかも1例を除いて、13例すべてが原形不定詞を伴っていた(その例外の1例も不定詞の省略用法であった)。
- 5) MEDには、(15b)の「可能性」の意味に関して次のような記述がある。
(i) In weakened varieties of sense (15a), in which the ability or potentiality becomes mere possibility, or is made contingent upon something else.
- 6) *Ayenb.* のレファランスは、「ページ/行」で行う。
- 7) さらにこの構文が今度は、仮定法の衰退と平行する形で、mayの方にuncertaintyを表す用法取得を強化したのであろうとHorobin(2007: 116-117)は主張している。
- 8) なお、記載されていた以下の意味はすべてME期になってから現れているものだが、PDEではほとんどが廃用になっている(knowについては(ii)に、witについては(iii)に提示する)。
(ii) a. acknowledge, confess, own, admit = ACKNOW, BEKNOW *Obs.* [c1200]
b. *trans.* perceive (with the senses) *Obs.* [c1330]
c. apprehend or comprehend as fact or truth: have a clear or distinct perception or apprehension of; understand or comprehend with clearness and feeling of certainty; get to understand, find out by reasoning [c1200]
(iii) a. *intr.* with *of*: be aware of (as existing, or as happening or having happened); know of [a1205]
b. with *to* and inf[initive]: be certain or confident, feel sure, expect confidently *Obs.* [1297]
c. experience *Obs.* [a1450]
- 9) これは、PDEにおいて、helpが「to不定詞」だけでなく、原形不定詞を取るパターンにおいて、言わば助動詞化してきている現象にも如実に表れている。
- 10) MED (s.v. *connen*)によれば、形態的には、直説法一～三人称単数でもcon(st)が現れ、直説法複数にcan(北部方言)が現れたことが指摘されている。
- 11) 参考までに、今回発見された「現在分詞」形を(iv)に、「過去分詞」形を(v)に挙げる。また、(vi)は否定接頭辞un-が付加され完全な「形容詞」になっている例である。
(iv) a. And *knowing* of ilk mans worde. (Ywain, 148)
b. yef he zuerþ uals be his *wytinde*: (Ayenb. 6/12-13)
(v) a. For me think hit not semly, as hit is soth *knawen*, (SGGK, 348)
b. The cause *yknowe*, and of his harm the roote, (CT(A), 423)
c. For þere I wende haue *wist* · nut now my wit lakkeþ; (PPI., 452)
d. of hire folies *ywyte* oþer yzoge oþer yherd. (Ayenb. 10/14-15)
(vi) a. Of sum adventurus thyng an *uncouthe* tale, (SGGK, 93)
b. For Frenssh of Parys was to hire *unknowe*. (CT(A), 126)
- なお、*Ayenb.* では、現在分詞は-ing形ではなく、すべて-inde形であり、witenの現在分詞形は全部で5例発見されたが、そのすべてがbe his/hire wytinde 'by his/their knowing'という連鎖であった。これはある種、witの動詞用法が特殊化していく典型例と言えよう。
- 12) もちろん節と共起するknowはOE期から存在していたと思われるが(MEDでは、c1175[?OE]と表示されている)、PDEにおけるその節との共起の日常性からしてみると、わずか2500行のコーパスとは言え、今回そこに1例も節との共起例が現れないということにはむしろ驚きを感じる。

参考文献

- Adrian-Vallance, E. et al. (eds.) 2009. *Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th edition. Harlow: Pearson Longman.
- Baker, P. S. 2007. *Introduction to Old English*. 2nd edition. Oxford: Blackwell.
- Benson, L. D. (ed.) 2008. *The Riverside Chaucer*. 3rd edition with a new forward by C. Cannon. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Benson, L. D. & Donoghue, D. (trans. & ed.) 2012. *Sir Gawain and the Green Knight*. Morgantown: West Virginia Univ. Press.
- Borroff, M. 2011. *The Gawain Poet Complete Works*. New York: Norton.
- Davis, N. et al. 1979. *A Chaucer Glossary*. Oxford: Clarendon Press.

- Fischer, O. 1992. (Middle English) Syntax. In N. Blake (ed.), *The Cambridge History of the English Language, Vol. II, 1066-1476*. Cambridge: Cambridge Univ. Press. 207-408.
- Friedman, A. B. & Harrington, N. T. (eds.) 1964. *Ywain and Gawain*. Early English Text Society, O. S. , 254. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Gradon, P. (ed.) 1965. *Dan Michael's Ayenbite of Inwit*. Vol. 1. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Gradon, P. (ed.) 1979. *Dan Michael's Ayenbite of Inwit*. Vol. 2. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Hall, J. R. C. 1984. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. 4th edition. Toronto: University of Toronto Press.
- Horobin, S. 2007. *Chaucer's Language*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Horobin, S. 2010. *Studying the History of Early English*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Kurath, H. et al. (eds.) 1956-2001. *The Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press.
- Mitchell, B. & Robinson, F. C. 2007. *A Guide to Old English*. 7th edition. Oxford: Blackwell.
- Mitchell, B. & Robinson, F. C. 2012. *A Guide to Old English*. 8th edition. Chichester: Wiley-Blackwell.
- 水谷智洋編 . 2009. 『羅和辞典』改訂版 . 東京 : 研究社 .
- Murray, J. A. H. et al. (eds.) Prepared by J. A. Simpson & E. S. C. Weiner. 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- 中山恒夫 . 2007. 『古典ラテン語文典』 東京 : 白水社 .
- 小野茂 . 1978. 『英語法助動詞の発達』 第2版 . 東京 : 研究社 .
- 清水誠 . 2012. 『ゲルマン語入門』 東京 : 三省堂 .
- Skeat, W. W. (ed.) 1867. *Pierce the Ploughmans Crede*. Early English Text Society, O. S. , 30. London: N. Trübner & Co. [Reprinted by Greenwood Press, New York, 1969].
- Smith, J. J. 2009. *Old English: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Tolkien, J. R. R. & Gordon, E. V. (eds.) 1967. *Sir Gawain and the Green Knight*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- Winy, J. (ed. & trans.) 1992. *Sir Gawain and the Green Knight*. Peterborough, Ontario: Broadview Press.
- Wright, D. (trans.) 2011. *The Canterbury Tales*. New edition with an introduction and notes by C. Cannon. Oxford: Oxford Univ. Press.